

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04748

研究課題名(和文) タブレット端末を活用した国語科教育「見ること」のカリキュラム開発

研究課題名(英文) Curriculum development of visual literacy in national language and literature courses using tablet terminals

研究代表者

中村 純子 (NAKAMURA, Sumiko)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：70761625

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：国語科教育において、映像制作による読解力育成方略を開発したことが本研究の成果である。小中高の文学教材を素材として、タブレット端末を活用し、カードや写真による絵コンテ制作、映像編集アプリを活用した映画予告編の動画制作など、様々な授業方略を開発した。学習者は言語表現と映像表現のつながりを考え、情景描写や登場人物の心情の精読に主体的に取り組む。また、制作グループでの協働作業や、作品発表会を通して、学習者は多様な解釈にふれ、考えを広げたり深めたりすることができる。この方略から、映像の批判的読解力と創造的表現力が育成できることを立証した。評価基準は国際バカロレア・プログラムを参照して開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

21世紀、デジタル技術の進展に伴い、SNSなどの映像コミュニケーションが普及した。映像の批判的読解力と創造的表現力は、高度情報化社会を生きる上で必要な基礎学力である。だが、日本の学習指導要領の教科の中に、映像の系統的指導は存在しなかった。本研究は、国語科で育むリテラシーの中に映像を学力として明確に位置づけた点に大きな意義を持つ。さらに、本研究はメディア・リテラシーの育成にもつながり、社会生活でよりよい情報活用者となる上で有意義な学びとなる。また、学習者に新たな文脈で文学や古典を学ぶことの意義を再確認させることができ、日本の言語文化の継承にも役立つ研究である。

研究成果の概要(英文)：The result of this research is the development of a reading comprehension strategy through video production in Japanese language education. Using literary teaching materials from elementary, junior high, and high school students, I developed a variety of lesson strategies, such as using tablet terminals to create storyboards with cards and photos, and movie trailer video production using video editing applications. Learners consider the connection between linguistic and visual expression, and actively work on depicting the scenes as well as carefully reading the emotions of the characters. In addition, through collaborative work in the production group and work presentations, learners can connect with various interpretations and deepen their thoughts. Applying this strategy, we proved that critical reading comprehension and creative expression of images can be developed. The evaluation criteria were developed with reference to the International Baccalaureate Program.

研究分野：国語科教育

キーワード：教育学 国語科教育 見ること ビジュアル・リテラシー メディア・リテラシー ICT タブレット端末

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 背景にある現状

高度デジタル情報化社会の今日、学習者の映像に対するリテラシーの育成は喫緊の課題である。近年、携帯電話のカメラ機能を活用した映像制作は児童生徒の日常生活に急速に浸透した。文字言語、音声言語と同様に、映像言語も第三の読み書き能力として、映像の批判的読解力と創造的表現力を育成する学習指導が必要である。

### (2) 現行の国語科教育の課題

これまで国語科では、平成 20 年版学習指導要領・高等学校『国語総合』『現代文 B』で、メディアとしての文字、音声、画像などの特色を捉えたり、表現の仕方や創作的な活動に取り組んだりする言語活動例が取り入れられた。また、平成 30 年版学習指導要領改訂に向けての中央教育審議会教育課程企画特別部会ではメディア・リテラシー指導の一環として、「見ること」の指導項目の導入を検討していた。また、全ての教科で、ICT 活用の推進が提言されてきた。しかし、具体的な実践開発は未着手であることが現状としてあった。

2013 年より文部科学省国際課の主導で一条校への導入が推進されている国際バカロレア(以下、IB)のプログラムでは、国語科に相当する『言語 A』で「視覚的スキル」も含めた指導項目が取り入れられ、評価基準も確立している。そこで、本研究の実践開発では、IB の評価基準を参照し、実践の開発と評価方法の開発である。

## 2. 研究の目的

本研究は、国語科教育において、ビジュアル・リテラシーの育成に対応する「見ること」の実践開発を目指すものである。タブレット端末を活用し、映像を分析する読解能力と、映像を制作する表現能力を測定し、授業を開発し、検証する。また、先進的にビジュアル・リテラシーを母語教育カリキュラムに取り入れている海外の事例や、国内での映像教育の実態を調査し、授業方略を分析することである。以上の成果を踏まえ、国語科学習指導要領に対応した実践を開発する。この研究が目指す映像の批判的読解力と創造的表現力は、デジタル技術の進展に伴い、SNS などの映像コミュニケーションが普及した今日の高度情報化社会において、必須の基礎学力となる。

## 3. 研究の方法

### 3 - 1 A : 文献研究及び国内外の視察研究

本研究に関する文献の収集と研究に取り組み、実践事例の収集のために、海外の IB 校などの視察を行った。さらに、研究成果の発表や情報収集のために学会に参加した。以上の研究から、ビジュアル・リテラシーの理論的基盤を追究し、指導内容と指導方法、評価基準を明らかにした。

### 3 - 2 B : 『見ること』のカリキュラム開発

東京学芸大学や、東京学芸大学附属中学校、川崎市立中学校の授業などから、生徒の映像視聴や制作に関わるスキルについてタブレット端末を活用した実践の検証を行なった。これらの実践検証から得られた成果を実践開発に反映させていくことである。

## 4. 研究成果

### 4 - 1 A : 文献研究及び国内外の視察研究

2017 年度は国内の先行研究の把握として、書籍を中心に資料収集にあたった。さらに、Julie Keane より“Media Production and Analysis An Introduction”(2015 Impact Publishing)の翻訳権を得て、共同翻訳に取り組み、メディア・リテラシー教育における映像制作の実践や理論的背景に関して多くの知見を得た。

2017 年 10 月に、バンコクインターナショナルスクール NIST での授業参与観察を実施した。この学校は小中高一貫の IB 認定校である。山田浩美教諭の MYP 中学 3 年生の MYP の国語の授業では魯迅『故郷』の授業の発展課題として、映画トレーラーの制作に取り組ませていた。中学 3 年生の映像制作スキルの実態と共に、国際バカロレア・カリキュラムにおける映像作品の評価の観点として次のような項目が明らかとなった。

#### 映像作品を評価するポイント

- ・描写：主題をイメージさせる風景等の描写の用いられ方
- ・音響効果：バックミュージックやその他の音(騒音、雑音、自然の音)等がどのように用いられているか。
- ・サイズ、アングル：映像がどのように撮影されているか。
- ・ナレーターの語りやテロップの文字がどのように入っているか。
- ・オーディエンスの設定 主題の印象づけ方 作中の登場人物の会話のどの部分を朗読で使うか。

2018年度は8月に東京学芸大学国際中等教育学校で行われたIB機構主催の教員研修ワークショップに参加し、DP Japanese A: Language and literature Cat 1(Japanese)に参加し、マルチモーダルテキストの分析の指導方法と評価方法を学んだ。

2019年度は5月に行われたIB機構主催のブラハでのDP Japanese A: literature Cat2 (Japanese)と、7月に神戸カナディアンインターナショナルスクールで行われたDP Japanese A: Language and literature Cat2 (Japanese)のワークショップを受講し、概念理解カリキュラムの重要性からマルチモーダルテキストを活用した最終課題の小論文の指導方法について学んだ。10月のバンコク視察ではNISTの大倉教諭のMYP「言語と文学」の授業から、ホラー映画の分析方略と創作活動の実際の参与観察を行った。

#### 4 - 2 B:『見ること』のカリキュラム開発

2017年度は国内の生徒の映像制作に関する実態調査及び映像指導方略の解明にあたっては、iPadを活用し、ワークショップのプログラムを開発した。まず、8月7日に東京学芸大学公開講座で現職教員対象に、ニュース素材としてのインタビュー撮影のワークショップを行った。11月、大学生を対象とした中等国語科教育法の授業ではiMovieの「予告編」のテンプレートを活用した大学紹介CM制作に取り組みさせた。2018年3月、千葉県私学協会の協力を得て、中高生32名を対象にiPadを活用した映像制作ワークショップを行った。

2018年度は、ビジュアル・リテラシーの活用の実態として、タブレット端末を活用した授業実践の開発と実態の調査と検証を中心に取り組んだ。9月、東京学芸大学附属小金井中学校2年の1クラスを対象に、映像理解ワークショップを行った。特別活動で、iPadを活用した映像制作に取り組んでもらい、その成果から中学生の映像制作の実態を確認することができた。

また、前年度視察したバンコクインターナショナルスクールNISTでの鲁迅『故郷』の授業を援用し、映画トレーラー制作の授業を開発し、その成果を、12月に川崎市立川崎高等学校附属中学校3年生3クラスを対象に実践し、その効果を確認することができた。

さらに、東京学芸大学の大学生を対象として、タブレット端末を活用した実践を開発し、模擬授業を行った。写真編集アプリPicCollageを活用し、組写真の物語作り。フリーズフレームの演劇技法を用いた『羅生門』の1シーンの絵コンテ制作。イラストと書道作品を素材に映像編集アプリiMovieを活用した『山椒魚』の映画予告編制作。映像編集アプリVivaVideoを活用した『山月記』の映画予告編制作。『桐島、部活やめるってよ』の小説と映画の比較分析。学校紹介1分間CM制作。

これらの実践調査から得られた知見を基に、積才房合同会社の協力を得て、映像の特質と仕組みの理解を促す映像教材の開発に取り組み、3月に動画撮影を行った。

2019年8月の国語科免許更新講習では小中高と多岐にわたる現職教員を対象に、タブレット端末を活用したワークショップを開催した。「ごんぎつね」「山椒魚」の場面を描いた絵カードの写真素材で構成する動画と作品の一場面の朗読の録音から、映画予告編の制作を行った。同月、メディア・リテラシー公開講座で、「ごんぎつね」の予告編を制作するワークショップを開催した、これらの実践から短編の映画予告編制作の方略とその効果の検証を得た。12月、中等国語科教育法の授業において、国語科教科書の定番教材の映像トレーラー制作に取り組みさせた。文学作品では、「少年の日の思い出」「走れメロス」「原爆詩」「与謝野晶子 短歌」「竹取物語」「羅生門」を扱った。さらに、評論のジャンルから「間の感覚」、メディア・リテラシーとして「グレダ・トゥーンベリの温暖化デモ」についても取り組みませ、この実践がジャンルを限らず、読解力の育成に役立つことを確認した。

さらに、前年度に開発したオリジナルの映像教材の検証実験を行った。本教材は、短編小説で主人公と副主人公の気持ちの交差する一場面を様々なアングルとサイズで撮影し40の動画カットである。これらを1シーンにつき5カットの動画を選び、タブレット端末の映像編集アプリでアプリでつなぐ活動である。多様なつなぎ方ができる教材である。学習者は本文の解釈を話し合いながら、登場人物の性格や心情を読み解き、編集活動に取り組んでいた。リフレクションでは、心情理解、場面設定の解釈に意欲的に取り組むことができたという反応を得られた。さらに、異なるアングルからの撮影の提案もあり、映像制作への関心の高さを看取ることができた。

以上、3年間の研究では、国語科教育におけるビジュアル・リテラシー育成の研究として、タブレット端末を活用した映像制作の教材開発と授業実践方略を完成することができた。また、国際バカロレアのMYPやDPのプログラムから、国語科教育での映像教材の取り入れ方、評価方法から知見を得ることができたのは大きな成果である。しかし、「A:文献研究及び国内外の視察研究」と「B:『見ること』の実践開発」の両方の成果を統合し、新学習指導要領に適合させた

カリキュラム開発と評価方法の確立を今後の課題として残している。今後も研究を継続していく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村純子	4. 巻 70
2. 論文標題 国際バカロレアにみる国語科教育の方向性 : PYP・MYP・DP「言語A」カリキュラム分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要. = 人文社会科学系	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/150688	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中村純子
2. 発表標題 国際バカロレア MYP『言語A：言語と文学』 教科構造
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第136回 茨城大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村純子
2. 発表標題 国際バカロレアが目指す概念理解と 国語科での指導の可能性 - IB「言語A」PYP・MYP・DPのカリキュラム分析から -
3. 学会等名 日本国語教育学会 大学部会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村純子
2. 発表標題 国際バカロレアMYP「言語と文学」における文学教育 「状況の中で生きる人間像」を探究する『故郷』実践
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村純子
2. 発表標題 History of Japanese Media Education in the Japanese Language and Literature course
3. 学会等名 International Media Education Summit 傳媒教育峰會18 香港 (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村純子
2. 発表標題 国際バカロレアDP「言語A：文学」における「見ること」の指導方略
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中村純子・関浩平 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 136ページ
3. 書名 「探究」と「概念」で学びが変わる! 中学校国語科 国際バカロレアの授業づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考